住・まちづくりフォーラム かわら版

ニューズレター第 18 号　　2006 年 3 月　発行

特集：第 18 回住教育フォーラム

路地裏の子どもの居場所づくり

－コミュニティ・アートの切り口から－

財団法人　住宅総合研究財団

18

目次

開催記録 ･･･2

フォーラム記録

趣旨説明　小澤紀美子 ･･･3

講演１：　中田弾、田上沙織 ･･･4

講演２：　後藤宜則 ･･･7

講演３：　椎原晶子 ･･･11

グループ討論･全体討論 ･･･15

延藤委員長まとめ ･･･20

見学会記録 ･･･23

第 18 回住教育フォーラム開催記録

テーマ：「路地裏の子どもの居場所づくりーコミュニティ・アートの切り口からー」

趣　旨：子どもとまわりの間がキレギレになりがちな現代社会。そこでは子どもの生きにくい状況がひろがっています。一方、路地は、人と人、人と活動を自然につないでくれる地域資源（タカラ）です。伝統的にそこで人々は自らの生活感を表現する道端園芸などを通して、まわりとつながっていました。

今、路地裏の「つなぐ力」に着眼し、子どもと住民たちがそこを表現の場にすることによって、独特の安心居場所づくりをすすめる事例があちこちにみえてきました。表現が子どもとまちの風景を同時的にはぐくみ、表現活動・成果を通してお互いに敬愛しあう関係をつむぎ、いろいろなしばりから解き放たれる自由なアート感覚が高められていきます。

このような意義をになう創造的経験を「路地裏の子どもの居場所づくりーコミュニティ・アートの切り口から」と題して相互に評価し合うフォーラムを開催することになりました。東京は、神田、向島、谷中地区でのこうした実践的取り組みを持ち寄り、まちにとっての子どもと表現の意味、子どもにとってのまちとアートの意味等を明らかにし、これからの子どもまち学習・まち育てのあり方の方向感を分かち合いたい。

とりわけ、神田の現場を歩き臨場感をもって課題に迫り、開かれた討論の場で主題の意味を深めたいと思います。

（住教育委員会委員長　延藤安弘）

日　時：2005 年 10 月９日(土)見学会 11:30～12:20，フォーラム 13:30～17:00

会　場：神田公園区民館（千代田区神田司町）

講　師：中田 弾、田上沙織（子どもと一緒にデザインしよう会）

後藤宜則（こどもが彩るまちづくり実行委員会）

椎原晶子（谷中学校）

参加者：建築・教育・まちづくりなどの研究者・実務者，学生，市民活動グループメンバーなど 35 名

企　画：（財）住宅総合研究財団　住教育委員会

委員長　延藤　安弘（愛知産業大学大学院 教授／NPO まちの縁側育くみ隊代表理事）

委　員　小澤紀美子（東京学芸大学教育学部教授）

木下　　勇（千葉大学園芸学部助教授）

町田万里子（小学校非常勤講師）

奈須　正裕（立教大学文学部教授）

堤　　祐子（仙台市教育局太白区中央市民センター 主査兼社会主事）

＊所属役職は開催当時

表・裏表紙イラスト：町田万里子

編集・文責：住教育委員会　事務局 伊藤・岡崎・岩間・平井

第18回住教育フォーラム

路地裏の子どもの居場所づくり
ーコミュニティ・アートの切り口からー

司会：　奈須　正裕（立教大学文学部教授）
　　木下　　勇（千葉大学園芸学部教授）
ファシリテーショングラフィック：
　　町田万里子（小学校非常勤講師）
　　堤　　祐子（仙台市教育局太白区中央市民センター主査兼社会主事）

<趣旨説明>

（財）住宅総合研究財団住教育委員会委員
小澤紀美子
東京学芸大学教育学部教授

■神田・向島・谷中での取り組み

お手元のプログラムに委員長の延藤さんからの開催趣旨が書いてあります。同じことを言ってもしようがないと思いますので、別の側面から今回の趣旨を考えてみたいと思います。

今回、主題に沿って、神田、向島、谷中３つの地域の方に切り口を明解にしていただくということで企画しました。この３つの地域から皆様が思い浮かべることは、東京にある古くからのまちということだと思います。近代化の過程で日本の場合、新しいものはいいことだということで、同じようなビルが並んでいる景観のまちになってしまいました。そういう中に息を潜めて、「生きる場」というのはどういう場であったらいいのかということで、それぞれ取り組まれている場所だと思います。そういう３つの地域で活動していらっしゃる方たちにお願いしています。

■子どもがまちでアート表現すると何が変わるのか

そこに、「子ども」という切り口で議論していこうという意図を入れました。私はマスコミが報道している子どもの問題は、大人社会の問題だと考えています子どもの目を通して考える、あるいは、子どもと大人がお互いに関係づくりをしていく中で今回のテーマが取り上げられました。

生活と生産が一緒だった時代、生きていくための糧を得るのが一緒だった時代と違って、いまは第３次産業が５割以上も占めています。そして情報消費型社会においては他者とのいろいろな経験が意味を持つと思います。あるいは関わりの中から生きていく意義、意味を見い出していくということが、とても大事なのだろうと思います。そういった意味での実践を通して、子どもがまちを舞台にアートを表現すると何が変わるのかを、お互いに自分たちの地域の課題とともに、考えていくことを考えてみました。

■「場所の力」を考える地域づくり

私はもっと日本の子どもたちに豊かなインスピレーションを与えたいという立場で、大学においても教員になる人とともに学んでいますけれども、そういったところがどういう意味があるのか、ともに考えていけたらと思います。

日本の子どもにいろいろなワークショップをやっていると、お子さんたちは非常に四季折々、よその国ではあまり感じないところを表現するということがあります。見学会で見た絵でも学年や、それぞれのクラスによって指導なさっている先生の個性も出てきていましたけれども、子どもの豊かな感性が感じられます。しかし、日本の子どもたちは大人に近づくにつれて、具体的には小学校高学年ぐらいから少しずつ自己表現をしなくなってきているのではないかと思います。

そういった意味で、１つは場所の意味というのでしょうか、「場所の力」というのでしょうか、私たちは本来、積み上げられてきた歴史の中に生きているはずなのに、そういったものを全部消し去るが如き地域づくりをやってきたと思います。そこでその意味を考えていきたい。

そして子どもの育ち、そして大人も育っていくときのお互いの育ち合いの関係をどうしていったらいいのか。それは何のために考えていったらよいのか。そして、これからどう行こうとしているのか、未来がどうあったらいいのかをともに考えていこうということです。

<講演１>

学生サークル

「子どもと一緒にデザインしよう会」
－神田地域での取り組み－

中田　弾
子どもと一緒にデザインしよう会

田上沙織
子どもと一緒にデザインしよう会

プロフィール

「子どもと一緒にデザインしよう会」は、子どもに関する興味のある学生で2001年に設立された。子どもと共に創造することで、まちの面白さ、楽しさ、喜びを分かち合い、まちの一員としての意識を育み、笑顔のたくさんあるまちをつくることを目的に千代田区で活動している。現在は、区内の大学や高校、他のまちづくり団体や青年会、町会などと連携しながら活動している。

中田：昨年、一昨年と部長を務める。現在は、学生代表として継続的にサークル活動へ参画するとともに、ちよだボランティアセンター運営委員を務める。また、今年度より始まった小学校放課後開放事業においても、学生ボランティアの中心として参画している。

田上：今年度より部長を務め、児童館イベント、中高生タイムボランティアなどに参加している。また、今年度より始まった小学校放課後開放事業にも学生ボランティアとして参加している。

■千代田区における子どもの環境

○中田　神田地域での取り組みということで、「子どもと一緒にデザインしよう会」の中田と田上が発表させていただきます。

まず初めに私たちが活動している千代田区の現状をお話します。子どもの施設としては公立小学校が８校、児童館が５館あります。平日の日中は小学校で勉強し、放課後は児童館で遊ぶ子どもたちの姿が多く見られますが、見学会で見ていただいた神田地域では児童館がなく、地域で子どもたちが遊べる場所がほとんどないというのが現状です。

コミュニティという視点からは、千代田区は２つのエリアに分けることができます。１つが神田エリアです。こちらは昔からのお祭りを通した地域に根付いたコミュニティがある一方で外から来た人はその輪の中に入りにくいというイメージがあるようです。また麹町エリアでは最近ではマンションなどが建ち、外からたくさんの人が入って来ているようです。このエリアでは外から入って来た人がすぐに入れるというコミュニティがある一方で、イベントなどを行うときに強いネットワークがありません。このような千代田区で私たちは活動しています。

■「子どもと一緒にデザインしよう会」

この団体は４年前に結成されました。現在では区内の学生を中心に40名ほどで活動しています。子どもを取り巻く環境が変化している中で、子どもに関わる環境デザインを子どもとともに創造することで、まちの面白さ、楽しさ、喜びを分かち合い、まちの一員としての意識を育み、笑顔のたくさんあるまちをつくることを目的として活動しています。活動を通して子どもたちにまちを知ってもらい、愛着を持つきっかけづくりとなっています。

活動の概要ですが、平日は「子どもの基地」での活動、また週１回定例会を行っています。また土曜日の午前中は小学校でのまち環境デザインワークショップを、午後には校庭開放でのプレイリーダー、「子どもの基地」での創造教室、また児童館で中高生とスポーツをしています。さらに月に１～２回、イベントなど子どもを対象とした活動のサポートも行っています。私たちは義務感からではなく、子どもたちとともに私たち自身も楽しむことをモットーに活動しています。

■児童館や地元商店と連携して活動

○田上　次に今まで行った活動の実例を挙げて、ご紹介します。

<創造・アート活動>　「子ども基地」で、もともと真っ白だった壁などに落書きやペイントをしてもらって、子どもたちが自由に表現できる場として提供しました（**図１**）。

これは靖国神社で行われた千両祭りのときの写真です（**図２**）。商店やコンビニから出た段ボールなどを利用して、子どもたちと一緒に玩具作りを行いました。こういったことを通して子どもたちのエネルギーを表現してもらいたいと思って、活動を行っています。

<異世代・異地域との交流活動>　他の地域に行ったり他の地域から招いたりして、異なる環境の子ども同士の交流の場を提供したり、また親と子、もうひとつ

上のおじいちゃんやおばあちゃんの世代と、子どもなどをつないだ交流の場を提供することも行っています。**図３**は杉並区でのまち探検に千代田区の子どもたちを連れて行って、杉並区の子どもと一緒に行いました。そのまち探検を通して地域の子どもたちがどのようにして普段遊んでいるのかなど、自分たちと比較する場としてお互い楽しむことができました。

図４は児童館で毎年行われている異世代交流会のときの写真です。児童館を利用している人の成果発表の場として行われていて、幼児から高齢者までが参加し、異世代の交流の場となっています。

<まちデザイン活動>　小学校の授業や土曜日に、遊びやゲームの中でワクワク、ドキドキしながらまちとふれあい、からだと心で感じ、身近な環境の良さや課題を自ら見つけ、評価し、一人一人がまちに対して何らかのアクションをするワークショップをしています。

図５は隔週の土曜日、小学校で行っているまち探検です。このときは実際に目隠しで杖体験や車いす体験をして、障害者の立場から自分たちが普段生活しているまちを見ていこうということを行いました。これによって普段、自分たちが見ているのとは違った目線で生活している人がいるんだということを学んで、子どもたち側の変化も見られたので、すごく意味があったと思いました。

図６は小学校の総合学習のときの作品です。まちの人に取材をして、その様子を子どもたちが新聞に表現しました。

<一緒にイベント活動>　児童館まつりや子ども縁日を中心に、地元の小中高生と一緒に企画運営をしたり、ビルの屋上に畑をつくり、一緒に育てて収穫して食べるなど、さまざまな活動を一緒に行っています。児童館でのおまつりは子どもと一緒に企画から考えて、当日は子どもと一緒に協力して運営を行っています。

秋葉原のビルの屋上で、おそば屋さんと協力してそば畑をつくっています。春に種を蒔いて夏にそばの花見をし、秋に収穫を行っています（**図７**）。神田のおそば屋さんに収穫した実でそばを打ってもらい、みんなで試食会を行いました。

<コンテスト＆実現プロジェクト>　企業や地元のお店と協力して商品や食べ物、ロゴなど、子どもたちが考えたアイデアを実現したり、イベントのアイデアを募集して子どもたちと一緒に企画したりしています。「こんなまちに住んでみたいな」コンテストというものを行い、**図８**はそのときの銀賞の作品です。内容としては18歳以下の人だけが入れる居場所をつくって、お店も子どもが担当して運営していくというアイデアの作品です。

また、秋葉原のビルの屋上でのそば畑でできたそばを利用して、「こんなおそば食べたいな」コンテストを児童館を通して行いました。食べたいおそばのアイデア、こんなおそばが見てみたいというアイデアを募集して、入賞作品は実際におそば屋さんに協力してつくってもらって、みんなで試食会を行いました。

<絵本・キットの開発と実践>　まちを楽しくデザインし、五感や創造をテーマとした子ども向けの実践型キット本を作成し、まち探検などで実践したりコミュニケーションをテーマとした絵本を作成し、さまざまな場所で子どもワークショップをしています。リレー絵本づくりというものを行って、１人１頁ずつ物語を書いては次の人に渡し、次の人がそれを見て続きを１頁書くというものを行いました（**図９**）。リレーのように絵本を回してグループで１つの絵本を作ることで、自分が想定していたのとは違う結末を迎えるなど、いろいろイメージが広がっていくのを体験して面白いイベントとなりました。

いままで私たちの団体で行っていたまち探検のプログラムを１冊にまとめ「まちデザインキット本」（**図10**）を作成しました。例えばまちのポストは、手何個分なのだろう、足何個分なのだろうということで、自分の体を使ってまちのスケールを実際に感じてもらうイベントを行いました。

<子どもの基地>　先ほど見学していただいた方もいらっしゃると思いますが、神田の路地にある空き屋を借りて子ども基地を作っています。いくつかの大学が当番でボランティア運営をしています。

図１

図２

図３

図４

図５

図６

図７

図８

図９

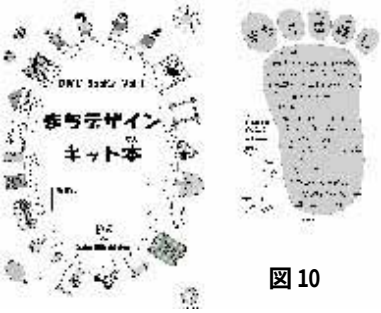


図 10

開放日は週３～４日、15～16時、土曜日は創造教室として、さまざまな若手のアーティストの方などを呼んで子どもと一緒に創作活動を行っています。落書きをしたりゲームをしたり自由に子どもたちが遊ぶ場として提供しています。普段は登録制で子どもたちは自分たちの責任で遊んでもらうことを前提にしています。またここの大きなルールとして、人の嫌がることはしないということで思いやりの気持も育ってくれればと思っています。

■子どもとの関係は時と場合で変化する

○中田　いままでデザインという言葉が出てきたと思いますが、私たちが言う「デザイン」とは、ヒトについては価値観の共有や相違の中でともに生きる意識のデザインを、モノについてはさまざまな発見、好奇心、創造する中で、単なるモノ空間から居場所のデザインを、コトに関しては相互関係、さまざまな体験の中で自分自身の心のデザインをしていくことを言います。これら３つの要素が重なるところに一瞬、一瞬があり、その重なりによって子どもたちや私たち一人一人の居場所となっていくと考えています。

子どもとの関わりについてですが、私たちは単に大人と子どもという関係だけではなく、時にはコーディネーターとして、また時にはリーダーとして、時にはファシリテーターとして、時には一緒に遊ぶ仲間として、それぞれ時、場合によって子どもとの関係が変化します。このような変化が子どもたちと本気で言い合える関係を育み、対等な立場で一緒に方向性を探っていける関係を生み出していくのではないでしょうか。

現在、私たちの活動はさまざまな人との協働により成り立っています。例えば中学校や小学校の教育機関、青年会やおそば屋さんなど地域の方々、行政や地域のボランティア団体や他大学の学生との協働など、幅広い分野でさまざまな人たちとのネットワークにより活動しています。

最後に、今後の課題ですが、１つ目に活動内容の充実が挙げられると思います。この活動の充実には他団体との協働の強化が必要であると考えています。また今までは子どもたちの視点だけでのプログラムが多かったのですが、今後は子どもだけでなく親子でのプログラムも増やしていこうと考えています。

次に子どもの基地についてですが、子どもの溜り場、居場所になるとともに、子どもと一緒に来た親の居場所にもなることが求められています。さらに親の溜り場となることで、子育て情報発信の役割も果たすのではないでしょうか。

組織についてですが、当初、10名ほどで始まった団体も、現在では他団体とも関わり活動地域も広がっています。そのような中で各エリア、各イベントごとに活動組織を再確認していかなければならないと考えています。以上で発表を終わります。ありがとうございました。

○奈須（上智大学）　ありがとうございました。ここで今の内容について個別のご質問があれば承ります。

○木下（千葉大学）　登録している子どもでなくても、フリーに行けるのですか。

○中田　「子ども基地」については登録制で行っています。その理由としては、１年間を通して例えば事故が起きたりしたときに責任をどう取るのかということで、１年間で1,500円の保険料をいただき、保険に加入していただいた中で活動しているということです。その保険に登録する前の子どもは、ただ見学ということで遊びの中には入れないという段階です。

○奈須　ほかに、個別的なご質問があれば伺います。

○石毛（江東区エコ・リサイクルハウス）　メンバーの方が40人ぐらいということだったのですが、いろいろな企画ごとにスタッフになる方は、ある程度技量を磨くとか子どもに向き合うときのいろいろな心得とか、そういうものは別のところで磨くというか、勉強するのでしょうか。

○中田　リーダーの育成ということについてですが、私たちは講座などは設けていません。実際に活動に参加する中で経験のあるリーダーのやっている様子を見てもらい、その中で、それぞれリーダーと言っても画一的ではなくて、個性があると思いますので、それぞれ個性が発揮できるような形で、どのように関わっていくかをそれぞれに考えてもらい、特技とかやりたいことを、それぞれの力を発揮できるようにはしています。

○石毛　イベント等の目的やタイムスケジュールなど、そういう制約のようなことの共有などは、どういうふうにしているのかということです。

○中田　意識の共有については、週に一度定例会を行っています。そちらで例えば月ごとの予定とか、年間のスケジュールとかを話して、例えば11月の児童館まつりについてはリーダーを立てて、そのリーダーでまずは学生をどのように動かすのかを考えてもらって、それを定例会の中で話をすることで、それぞれの意識の確認をしてもらうようにしています。

<講演２>

PTA 有志による

子どもが彩るまちづくりプロジェクト 2004 年5～8 月

－向島地域での取り組み－

後藤宜則
こどもが彩るまちづくり
実行委員会　代表

プロフィール

2004 年１月、子どもが彩るまちづくりプロジェクト実行委員会を発足。同年の春から夏にかけて、東京は下町「向島」を舞台に、地元の子どもたちがまちを読み込み、再発見してゆく、いろいろなワークショップを展開する。
まちへ繰り出し、人と触れ合い、普段と違った視点でまちと関わり、最後は子どもたちとアーティストで大きな壁画完成させ、向島から新しいアートを発信させる。
向島在住８年目の公務員。３児の父　地元小学校 PTA 役員、町会役員を務める。

私はほかのお三方と違い、前からこういう活動をしていたわけでもないし、今後もこの活動をずっと続けていくというわけでもありません。娘の通う小学校のＰＴＡ役員をやってきたことがきっかけでこの活動を始めました。2004年、春から夏にかけてのひと夏の活動記録ということで全くの素人ですので、素人がこういうことをやったという視点でお聞きいただければと思います。

向島という場所は昔ながらの路地がいっぱい残っている地域です。都が防災の関係で危険度調査というのを新たな視点で始めたときに、ワースト20の中に向島地域が11も入っていたというぐらい非常に危険な地域になっています。家屋が倒壊すると路地が狭いため避難することが困難な地域です。そんな向島をイメージしていただきながら聞いていただきたいと思います。

■きっかけは学校週５日制

このプロジェクトは2004年の５月から８月にかけての事業でした。プロジェクトのきっかけは学校の完全週五日制でした。平成15年度に入って、休日に何か活動した場合には学校単位に墨田区が補助金を出しますよという制度が始まりました。

それでＰＴＡの役員会で、補助金が２万円ぐらい下りるので何かやりますかという話になりました。これまでも行っていたお餅つきといった話や、やはり休日のための補助金ですから、休日を何日か重ねていって継続的にできる企画がいいのではないかということで、屋上菜園という話もありました。

私の家の隣に、資生堂の墨田作業所があり､56メートルの長い塀がありました。その塀に子どもたちに絵を描かせたいなということは前々から考えていたので、その企画を提案しました。ただ描くのではなく向島のまちを学習しながら、最後には向島の何かが壁に描かれるようなイベントにしたいということを考えました。そんな話を提案したら、それはいいということになりました。ところで資生堂は壁を貸してくれるのかということになり、私が資生堂にプレゼンをしに行きました。ここからはそのときのプレゼンの資料になります。

■まち全体にメリットのあるイベントに

連携でまちに活気が溢れ出す。家庭、地域、学校、企業、ＮＰＯ。ただ「壁を貸して下さい」と言ったら絶対貸してくれないなと思いましたので、みんなを巻き込んで、巻き込んだみんなにメリットがあるんだよということで持って行きました。子どもを中心に家庭、地域、ＮＰＯが入ります（**図１**）。

2001年ぐらいから向島に若いアーティストの方がたくさん来ていて、面白い活動をしているという情報を小耳に挟んで

図１

いました。それに関係している「向島学

会」という団体がありまして、まだＮＰＯにはなっていないのですが、そういう団体に聞けば、子どもたちを指導してくれるアーティストを紹介してくれるのではないかということで、ここではＮＰＯに入れています。子どもを中心にいろいろな人たちが関わって、子どもが最終的に向島を読み込んで壁画を完成させられればいいなということです。

ドラえもんとかピカチュウなどの落書きになってはまずいなということで、向島の歴史をちゃんと勉強し、地域のお年寄りにも話を聞いたり、向島を長いこと勉強したりして壁に描くので、キャラクターの落書きにはなりません。もちろんアートについてもしっかり勉強しますという具合です。ちょうどその壁の前が地域の公園になっていて、公園からよく見える壁なので、絵ができたら公園自体のイメージも変わり、そういう意味では自分たちがまちを変えられたということで、子どもは自信が付くだろうということです。

企業もイメージアップになる、地域にとっても公園周辺がきれいになって絶対にメリットになりますということです。若いアーティストの方も、自分の作品の理解者が増えるので、これはいいことだろうということ。一緒に活動する保護者も自分の子どもだけでなく、よその子どもも見られる。学校にとっても地域活動で子どもがまとまれば、学校での活動も絶対よくなるということで話を持って行ったら、壁だけでなくてお金もいただけることになりました。

■地域ネットワークと学校の協力

早速ＰＴＡに持ち帰りましたら、今度は２万円では足りないんじゃないのという話になりました。先ほどお話した向島学会という所に、アーティストを誰か紹介してくれませんかということでお話をしたら、地元にある現代美術制作所というアートスペースを経営している曽我さんという方が手を挙げてくださいまして、その方がアーティスト探しもしてくれたし、お金の算段もいろいろ考えてくれて、メセナ協議会を通じて助成金をいただきました。

だんだん話が大きくなってきて、ＰＴＡと切り離して、「子どもが彩るまちづくりプロジェクト実行委員会」というものを作ってやることになりました。ＰＴＡとは切り離れたのですが、ＰＴＡ有志がほとんど中心になってやっていますので、学校にも協力依頼しました。図工の先生も乗り気だったので、学校でも活動できないかということで、当時の校長先生にも話し、それはいいことだということで、教育課程の中に位置付け授業としてもできることになりました。

■若いアーティストが企画の中心に

地元のアートディレクターの曽我さんにアーティストを探してもらい、水内貴英さんという当時25歳のアーティストが快く引き受けてくださることになりました。彼はずっと人と関わりながら作品づくりをしてきた方で、向島というまちにも非常に興味を持ってくれました。

彼を見つけたのが２月ぐらいです。実際、壁画を描こうというのは８月の夏休みと決めていましたから、どんなふうに壁画に向けて子どもたちの意識を高めるかについても、彼に託しました。２ヶ月ぐらいかけて向島のまちを歩きながら、彼がいろいろと考えてくれました。

まちを読み込むことを長くやりたいということ。普段と違う視点、違う触れ方でまちを回って、こんなんでいいんだ、そんな難しいことじゃなく遊びながら作品ができてしまう。私が最初に考えたのは学習ということでしたが、こういうのもありなんだ、こんな触れ方でもいいんだよという、肩の力の抜けた中身のワークショップをいくつか考えてくれました。

■「向島宝探し」

実際のワークショップを見ていただきながら説明したいと思います。最初は５月の日曜日にやった自由参加の企画「向島宝探し」です。自分たちで宝物を作って、それを今度は向島のまちに出て行って路地の中に隠す。隠したものを今度は探しに行く。

これは宝物を作っている最中です（**図２**）。いろいろな素材を持って来て自分たちで「これは宝だ」というものを作って向島のまちに隠しに行きます。隠した物を地図に書いていきます。地図も一般的な道路地図ではなく、ここに、こんなふうに見える物があるよとか、そこから何歩進んだらこんな物があってというような、ちょっと変わった地図で、巻き紙に書いていきます。グループごとに隠しに行って、他のグループの地図を持って探しに行きました。

水内貴英さんは常時80人ぐらいのアーティスト関係というか、学生やＯＬさんなど、こういうアートイベントに参加してくれる人とのネットワークをもち、毎回、10～20名ぐらいのボランティアの若い人たちが来てくれるのです。こういう親でもないし先生でもない、まちの兄貴みたいな人がワサワサっと来て一緒になって楽しみながらやることで、非常に子どもたちも肩の力が抜けて、こんなんでいいんだという感じで、楽しみながらワークショップを進めることができました。

■「ネコの目散歩」

「ネコの目散歩」は、小学校６年生の授業の中でやったものです。子どもたちは事前に２週間ぐらいかけてネコの実地調査を登下校の間にしています。ミニネコマップというものを持ってどこの路地でネコを見つけたという情報を収集し、それを大ネコマップという大きなマップに集約し、全員がネコのたくさん出そうな路地をインプットし、この日は図工の時間、自分たちでネコに変身しインスタントカメラを持って路地に行きました。ネコを撮るのではなく、ネコの視点でまちを撮影しようというイベントです。寝そべってネコの視点でまちを撮影しました（**図３**）。ポラロイドカメラで撮って、余白にネコの気持になってコメントを書きました。最終的にはネコの目の作品で展覧会をしました。

先ほどの宝探しも、このネコの目散歩も、実は私たちが子どものころに路地に出てやっていた遊びなのです。でも今の子どもたちはそんな遊びを全然しないので、非常に子どもたちには新鮮に映った

ようです。

■「路地プロジェクト」

５年生の授業で、３週間にわたって「路地プロジェクト」をやりました。明治通りとか水戸街道という太い通りが近所にあるのですが、路地には名前がないので、自分たちで自分たちの好きな路地を見つけ、そこに勝手に名前を付けてしまおう。さらにそこにあったらいいなと思う物を自分たちで作って置いてしまおう。置いたらその路地のイメージも変わるし、何か良いことにつながるのではないのという企画です。初日は路地調査に行きました（**図４**）。路地に名前を付け、あったらいいなと思う物を考えて、次の図工の時間に、そのあったらいいなと思う物を作り始めました。ベンチを作ったりトーテムポールを作ったり、子どもたちの考えることですからいろいろなのですが、この物作りは２週間かけて行われました。この作品は下がネコの休憩場所になっていて、上は人が座る休憩場所です（**図５**）。

完成した作品は子どもたちがそこの路地へ持って行くわけですが、路地ですから全部軒下に置かなければいけないのです。人の家の敷地に置くので、その交渉も自分たちさせました。そうは言っても絶対駄目と言われるだろうと思い、実は保護者の間で予め、ここだったらオーケーしてくれるよという家を見つけておいたのですが、結局、子どもたちは「そこじゃ駄目」と言うのです。ここに置きたい、これこれこういう理由があるからと、結局、自分たちで交渉し、全部置かせてもらうことができました。その日のうちに取り外さなければいけない箇所もありましたが、いまもずっと置かれている場所もあります。

■「顔バトル」

次の「顔バトル」は、向島の人をテーマに、またインスタントカメラを持ってまちに繰り出しました。これは授業でなく、日曜日の自由参加の日です。

向島でいちばん活気のある商店街に行き、商店街の人たちに写真を撮らせてくださいと子どもが自分で交渉しました。睨めっこをした写真を撮ったり、魚屋さんではお魚を持って撮ったりしました。撮らせてもらった後は必ず握手をしてお別れします。

今度は学校に帰って来て、自分たちの顔をいろいろな素材で作ることにしました。出来上がった顔にはアーティストの水内さんが透明な樹脂を流し込んで、プレートにしてくれました。このプレートは最後の壁画作成のときの壁画にランダムに貼っていったのです。

■「壁画」

７月30日から８月１日までの３日間で「壁画」を完成させました。初日は、壁が大きいので子どもたちが壁を前にして萎縮しちゃいけないというので、とにかく壁とペンキで遊ぼうということで、描いちゃうのでなくグシャグシャにしちゃおうという感じでやりました。これはローラーで壁塗り競争です（**図６**）。ただ走って塗るだけで楽しいのです。これはドリフの「いい湯だな」をテーマにほうきで塗るというものです。とにかく普段やったら絶対怒られることをこの日はやりました。

この日のグチャグチャに塗った線が、次の日のちゃんとした絵を描くときに生きていて、次の日は、みんなで住みたいなと思う家を描こうということで家を描きました。ずっとそれまで向島をテーマにまちの中に出て歩いていたのですが、結局描かれたものには、そんなに向島らしいものはありませんでした。でも踏切があったりネコがいたり、ちょっとは向島らしいところも出ていました。この日は墨田川の花火大会の日で、夜にペンキの垂れの部分を取る作業を、アーティストと一緒に実行委員がやりました。

結局、２日目にほとんど絵ができてしまったので、３日目は壁塗りは急遽やめて、もう１回向島のまちへ繰り出すことにしました。向島のまちでポストイットに書かれた指令をたくさん貼り付け、子どもたちがまたグループに分かれて、その指令カードを探して回ります。書かれた指令をこなすときれいなタイルをもらえて、そのタイルを壁に貼ることができ

図２

図３

図４

図５

図６

図７

るというワークショップです。書かれている指令は難易度の異なるいろいろな指令があって、高度な指令は人と何か会話しなければいけない指令です。「まちの人に会って握手をしてください」とか、そういう指令をこなすとタイトルのほかに人気のあるお菓子も一緒に付いてくるみたいな。そういうことで、子どもたちがまちへもう一度繰り出して向島のまちを楽しみました。最後は資生堂の中で乾杯をして終わりました。

子どもたちが壁に描いた線を残し、この日から１週間ぐらいかけて、アーティストがアレンジをして完成ということになりました。いろんな子どもが描きましたから、全く匿名的な絵の固まりというか、それでいて色調は整っていますから何とも言えない楽しい絵になりました。アーティストは壁画ということで本当に悩みに悩んでいました。特に公園の真ん前だということで、本当にみんなに愛される絵ができるのだろうかということで悩んでいました。しかし、最終的には非常にいい絵が生まれて、道行く人が止まって眺めていくような壁画が完成しました（**図７**）。

■子どもも大人も成長できた

子どもたちは最初の思惑どおり、非常に自信が付く結果となりました。学校でも今までにやったことがない、こういうたくさんの大人たちを招いての授業、これも非常に教育効果が上ったと考えています。いろいろあったのですが、地域にとってもこの絵ができて本当によかったと最終的には喜んでもらっています。アーティストもインスピレーションが沸き、自分の作品づくりにかえっていきました。

何よりも携わった大人たちがいちばん成長できたなという感じです。ここまでたくさんの人たちを巻き込むイベントになるとは思っていなかったので、私をはじめ、みんなが苦労しながらやった結果、非常に良い輪が出来上がりました。この実行委員会自体はもう終わったのですが、そのつながりが今も続いています。

ちょうど私たちの世代は新人類と呼ばれていて鉛筆を指先でくるくる回せる世代です。無気力・無感動・無関心の三無主義で、マニュアル世代とも呼ばれてました。特に都会の私たちの世代は人とのつながりをできるだけ絶って、面倒なことは紙に書いて渡してちょうだいみたいな、そういう世代です。けれども、このイベントを通して思ったことは、まだ捨てたものじゃないなと、そういう世代でもやればできるじゃないかというのを非常に感じました。

ＰＴＡの親父の会の普及など、地域の中での大人のつながりが大事だということが再認識されている傾向があります。私もできるだけ今後も何かのきっかけがあれば、こういった活動を続けていきたいと思っています。最後までご静聴ありがとうございました。

○奈須　ありがとうございました。個別的なご質問があればお願いします。

○伊藤（東京大学）　素晴らしいプロジェクトだと思って拝聴させていただきました。壁画の例えばメンテナンスといったものというのは、どういうふうにされていたのですか。

○後藤　壁画のメンテナンスについては資生堂側から最初にいわれました。これを放ったらかしにしておいては困るよという話だったのですが、実は再開発でこの壁がもうそんなに長く存続しないということを言われて今ます。長くて５年というスパンです。ここも、それぐらいは保つだろうと思います。ペンキは関西ペイントから提供していただいたのですが、体に優しくて長持ちするペンキということでいただいていますので、壁がなくなるまではこの壁画は保つだろうと考えています。

○町田　壁画を描いているときの子どもたちは開放感いっぱいで、さぞ楽しかったと想像できるのですが、自分たちの描いた絵は最後に変わってしまったわけですよね。自分の描いたものに新たに付け加えて仕上げたわけですが、そうやって変わったことについては子どもたちは最初から予想があったのでしょうか。そういうことについて子どもたちの反応がありましたら教えてください。

○後藤　最終的に壁画を手直しすることは、子どもたちに予め伝えてありました。うちの娘たちも参加して描いて、自分の思った色と違ったというので残念かというと、そうではないみたいなので、線や形が残っているということで最終的には文句は誰からも出てはいません。

ただ、去年も東京都の図工研究会でこのプロジェクトについて発表したのですが、教育的観点、図工の観点から言うと、これはとんでもないという意見もいただきました。子どもの絵にアーティストが手を加えてしまうなんてとんでもないと。ある意見はそうですし、ある意見は、これはそういうこととは全く別なものなんだよというお話もいただきました。それは賛否両論分かれるところだと思います。

○奈須　コミュニティ・アートのところに引っかかってくる重要なことだと思いますが、ほかにいかがですか。

○延藤　コンセプトとして、イベント性より継続性というのが最初に出てきたのですが、継続性という点ではどんなふうに展開されるのでしょうか。

○後藤　全部を通して参加できた子どもというのは、いないのです。どうしても６年生だけの授業があったり、５年生だけの授業があったりということで、全部参加というのは１人もいないのです。ただ、この壁画の３日間と自由参加のときは必ず参加したという子どもはたくさんいます。５、６年生もその授業がきっかけで結局、次の顔バトルであるとか、この壁画に参加したという子どもがいますので、私が当初イメージしていた継続性ほどではありませんけれども、ある程度向島をいろいろな視点から、子どもたちが時間をかけて見つめることができたのではないかと思っています。

<講演３>

長年にわたる地域団体の連携による

谷中のまちと子どもたち

－谷中地域での取り組み－

椎原晶子
谷中学校運営人代表
NPO**たいとう歴史都市研究会**
副理事長

プロフィール

東京・上野・谷中・根津・千駄木地域の親しまれる環境調査に加わったメンバーらと、平成元年（1989）まちづくりグループ谷中学校を結成。地域の生活文化にあった住まいやまちづくりを目指して、歴史的建物の保存活用、地域になじむ景観アドバイス、まちじゅう展覧会「谷中芸工展」、水や緑の復権、ゆっくり歩ける道づくり、などにとりくむ。
都市デザイン事務所勤務を経て、2000年より東京芸術大学大学院保存修復建造物非常勤講師、2003年よりNPOたいとう歴史都市研究会副理事長。

谷中学校というまちづくりグループを平成元年につくりまして、谷中のことにいろいろ関心を持ってずっと住んでいる人や、谷中が好きで住み着いてきた人や、いろいろな立場の人と一緒に谷中を学んで、学んだことをまちに返そうという活動をやってきました。

谷中学校というのは任意のグループですが、ほかにも町会などたくさんのグループ活動があります。私も谷中学校を始めるちょっと前から谷中に住み着いて、いまでは家族で住んでこどもたちも谷中で大きくなり、いま小学生です。そういう中で大学でも教えたり、「ＮＰＯたいとう歴史都市研究会」という、古い建物やまちを生かしていこうという会をやったり、いろいろなネットワークの中で活動しています。

その中で、こどもたちはいろいろな人たちをつなぐきっかけになっています。谷中に限らずほかのまちでもそうだと思いますが、まちの将来を考えていこうとしたときに、こどもたちがそれをどう受け止めて、自分たちがどうしていくのか、それを考えるきっかけづくりができればいいなと思っています。歴史ある町会もあれば新しい団体やアーティストなど、いろいろな人がいます。こどもをきっかけに一緒に考えると敷居が低くなり協力しあいやすいので、いろいろなところでこどもたちと一緒に考えていく企画が動いています。神田や向島の取り組みも、すごく深くて私たちも共感し、そういうふうにやるのかと思ったところがあります。今日は谷中で今まで関わってきた例をご紹介します。

■まちの再発見・育成、提案、取り継ぐ

谷中は上野の森の山に続く寺町で、台東区の西のほうにあります。江戸時代からの寺町で坂と緑のまちです。少子高齢化は進んでいるけれどもコミュニティは盛んです。芸術文化の蓄積があるところですが、まち中なので通過交通が増えていて、一部で大きな開発もあり、何とか谷中らしいまちづくりをしたいという取り組みもあります。

今日は路地がテーマになっていますが、１本裏に入るとたくさんの路地や木造の家があって、そこでの暮らし方も生きています。東京都で防災上危ないと言われるエリアもあり、だからといって全部家を燃えなくして道を広げればいいのかというと、そうでもない、路地文化を生かしたいという声もあって防災性との両立も課題です。まち歩きの人も増えて家の中を覗いていく人もいて困るという声もあるのですが、谷中のいいところは自分たちだけでなく、みんなにも知ってもらいたいという開かれた気持ちも持っています。そういった普通だったら両立しないことも何とか両立して、谷中らしさをつくっていこうというのが谷中のいまの課題です。

その中で谷中学校は平成元年から活動してきました。３つ大きなテーマがあります。１つ目はまちの再発見・育成、２つ目はまちに具体的にどんな建物や町並みがいいか提案してみる。３つ目はまちを取り継ぐということで、いろいろな団体をつなぐような路上パーティ、コミュニティまつりなどまちの催しに参加し、こどもたちを介したいろいろな取り組みを展開しています。

図1

図2

図3

図4

図5

■子どもとまちの宝を発見する芸工展

まちとこどもがアートを介在して変わっていった例で、どんなことがあったか思い起こしてみると、１つ入口として、「こどもたちとまちのたからを発見する」という取り組みがあります。自分たちがやっているものでは「谷中芸工展」といういつものまちを再発見するイベントがあります。他にもまちのまつり、アートイベント等、いろいろな団体がいろいろなことをしています。

これらを毎年繰り返し行いながら、でも新しく体験していく中で、いろいろ発見があります。

これは「まちじゅう展覧会・谷中芸工展」で、今ちょうど開催中です。期間中、まちじゅうの手作りスポットやお店、その期間中のアーティストの企画、こどもたち参加のイベントを冊子にし、地図付きクリアファイルに入れて紹介しています。クリアファイルからこれを抜くと日常の手作りのお店やスポット紹介の地図になります（**図1**）。

拠点になる場所があって、ここがマップを配り所やインフォメーションセンターになります。スタンプラリーをやっていて、小学校にそのスタンプラリーのカードを配ると、子どもたちが路地裏のいろいろなスタンプがある参加企画に回って行き、普段は中まで入れなかった所まで入って行き、店のおばさんと話をしたり、地元の子も新たな発見をします。

■住民もアーティストも一緒に取り組む

これは落書き大会です。これも13年目になりますが毎年人気のある企画です（**図2**）。「みんな集まれ落書き大会」というタイトルで路上や公園でやります。大きな紙に新聞紙や葉っぱで落書きをするという単純なものですが、書くうちに気持が自由になっていっていろいろなものを描き出します。最初はキャラクターも描いたりしますけれども、やっていくうちに自由だと意外にキャラクターを描かなくなっていきます。筆の動きと自分のからだの動きに身を委ねていって、それが快感になっていってだんだん手や足やお尻で描いたりします。大人も加わり、交流の場になる、この催しを毎年やっている方は、まちの写真屋さんのおばさんです。こどもの声のひびく町にしたいと、紙を提供してくださってやっています。

また、アーティストも多く住み、関わってくる土地柄なので、アートイベントとして企画する人もいます。「柿の木プロジェクト」と言って、宮島達男さんというアーティストが長崎で被爆した柿の木の苗の２世を各地でこどもたちに植樹してもらって、それを次の世代につなげていくアートをやっています。それに呼応して、地元でこどもたちに造形を教えていたハイケさんというドイツ人のアーティストがこどもたちと一緒に、まちのコミュニティセンターで植樹イベントをしました。

でもアーティストだけが企画してやるわけでなく、植樹を主体的にすすめたのは町会長さんや、写真の餅つきで餅をついているまちのコミュニティ委員会の皆さんです(**図3**)。コミュニティ委員会としても、会の20周年で何かこどもたちが未来の谷中を考え、平和を考えるきっかけをつくりたいと考えていました。そこで被爆柿の木を受け入れようという話になり、まちの人たちの願いとアーティストの願いが重なるところで催しが成り立ちます。柿も生き物ですから末長く育てる土地と世話する人をもらわないと生きていけないので、コミュニティセンターなど、まちの人がずっと見守れる所に場所を探して植樹祭を行ったところです。

これは５年後ぐらいから実がなるようになって、そのときにはこどもと一緒に柿を取って剥いて干し柿をつくるイベントを毎年やっています。

そのほかにもいろいろな季節の行事があって、節分、花火、七夕、おまつりなど、そういう季節、季節を捉えてこどもたちと体験できる事をやっています。これは防災広場での七夕づくりで、小学校のこどもたちが先生と一緒にやって来てつくっていきました（**図4**）。結構大きなのができて、広場にドンとあるとなかなか圧感です。これにはアーティストなどは関わっていないのですが、誰でもできて、でも大きさの勝負というか、場所

との関わりで「ああ、作れたなあ」という感慨が出てきます。

■からだを使って遊びこむ

２番目にこどもと関わるときに心がけているのは、できるだけからだを使って遊びこむということです。これは谷中ジャングル探検隊という企画で（**図５**）、学童保育と谷中学校の有志で行った一種のウォークラリーです。井戸水を自分で汲んで飲んだり、お寺の森に入れてもらって森の音を聞いたり、種を探したり、森の大王と呼んでいるのですが、樹齢700年の木に触わらせてもらったり、そういった足元の自然を自分の手や足を使って辿っていきます。

自分の住んでいるまちは、普通に歩くとアスファルトの道とか普通のまち中の風景に見えますが、ちょっと裏に入り、お寺の奥に行くと大自然がまだあるんだと実感できるしくみを考えました。カード仕立てにして、この図は後でまとめたものですけれども、１から20までの自然のポイントカードを実際のまちの中に隠してあって、それを１つ見つけると次のカードを見つけるヒントが書いてあり、辿りながら行くと最後は森に辿り着けるというゲーム形式でやってみました。

これは「下町こども工房」という企画で、児童館やプレーパークたいとうの会というグループがやっています。普段の公園を貸し切っていろいろなことができるのですが、ジャングルジムに枝葉をつけて本当にジャングルみたいにしたり、木と木の間にロープ渡しをしたり、泥だんご作りとか、さっきの落書き大会もありました。ボディペインティング状態になって遊び込み、みんなすっかり満足して帰って行きました。

■まちを生かす担い手だという実感を

３つ目のポイントとして、これは別に意識的に教える感じではないのですが、こどもたちと、まちの今とこれからをつくっているんだなと実感できることを心がけています。こどもたちも、自分も役割を担ってまちを生かすんだと感じることがポイントだと思っています。

いくつかご紹介します。お屋敷跡の土地を防災広場として区が買ってくれました。その利用と維持管理をまちの人とやっていけるようにしようと検討中です。がちがちの舗装の広場でなく草っ原の広場にしたいという声が多い。そのためにはまちの人もこどもたちも、自分たちで何かしなければと、まずは石拾いをやって石のタワーを積み上げる。そのときに一緒に防災訓練をやって水のタワーのすごさを見てみる。夏には虫取りと写生会をやってみる。

こんな体験を繰り返し、その拡大バージョンとして防災ミニキャンプが2004年11月に行われました。このときはいろいろな団体が協力しあいました。青少年育成の委員会、コミュニティ委員会、まちづくり協議会、学童保育父母会、プレイパークたいとうの会、ＰＴＡも協力しました。事務局にＮＰＯひとまちCDCが入りました。

建築学会と大学も協力してシャボン玉みたいなエアドームを作り、防災訓練的な体験をしました作り（**図６**）。中に入ると意外ときれいに空が透けて見えて、中で段ボールのお家を作って入れました。外ではシャベルでひたすら穴を掘り、木工作をする（**図７**）。段ボールで家を作ってみる。廃材を切って組み立ててみる。鋸を使って自分の家や居場所を作ってお茶をするぐらいまでやってみる。夕方からは飯ごう炊飯をしました。ボーイスカウトの人たちが火を熾し、みんなで炊出し訓練でカレーを作り、これは夜までやりました。本当はお泊まりもしようという企画もあったのですが、そこまでは冒険しませんでした。何人か世話役の人は泊まっていました。こどもたちと夜まで防災の体験をしつつ、防災広場の空間や使い方を実感しました。

もう少し日常的なものだと、谷中霊園という大きな墓地があります。東京都のものですが、ブロック塀が危ないからフェンスに改修しますというお知らせが来て、でも全部が全部フェンスになっても物々しいし、昔の絵を見たら生垣だったから生垣にしてみたらどうだろうということになりました。地域の人が維持管理

図６

図７

に参加してくれるのだったらいいですよという話で、ご近所の方とも維持管理をどうするかという話をずいぶんした上で植樹をすることになりました。

まちづくり協議会の環境部会と谷中こどもクラブという、学童保育の子どもたちと一緒に植樹し、植えるところから地域の人が関わるようにしました。植樹をしていてネコの死体を見つけたり、植樹の後に演奏会をしたり、いろいろなことで盛り上がりました。自分で竹を取ってきて尺八を作るお兄さんがいてこどもたちも一緒に吹かせてもらい、ケーナの楽隊が墓地の中で演奏会をするのも奇妙な風景でしたが、とても印象に残る機会になりました。

■臨機応変に相互連携できる関係

普段のことで言えば、まちのまつりは、毎年の生活の節目になっています。鎮守の諏方神社は800年の歴史があります。その夏祭りのときには、こどもたちが太鼓をたたくなど、こどもなりの役割があります。10月は菊まつりをやっています。これは20年ぐらい前から再興されたまつりで、明治の菊まつりの賑わいをもう１回呼び起こしたものです。この菊人形の頭は地域の人形師さんが作って、菊は地元の小学生が下ごしらえをします。獅子

舞を幼稚園の子どもが地元の人に習ってお寺の舞台で披露しています。

先ほどの向島や神田のように、いろいろな方や団体とうまくいくことが大事だと思います。谷中でももともといろいろな団体があります。しばらく前までは、新しい団体のあの人たちは何をしに来た人たちだろうとか、学校は学校、学童保育は学童保育というように、連携が薄い面がありました。それが現在では何かやるときには声を掛け合って共催でやり、実験的にやってみたほうがいいときは小さいまとまりでやるとか、臨機応変に、でもお互いの動きを知りつつ連携する関係ができつつあるところです**（図８）**。その中で個々人のいろいろな発想や活動も豊かになってきている気がします。

最後に、こどもとアートがまちを変えるとすればどういうことがポイントかなと考えると、繰り返しになりますけれども、頭も使いからだも伴った実体験をしながら遊びこむということ。あと自分が責任とか役割を担うということ。まつりでも作業でもアートでも、アートと作業はもともとそんなに違わない、同じ根っこのものだと思います。手とからだの動きとが感動を伴って刻み込まれて思い出になっていく。それがまちに自分が関わった実感になっていく。そういったことが大事かなと思います。大変だった、でも楽しかったという思い出になればいいかなと思います。それにこどもたちがさらに主体的に取り組めればいいのではないかと思っています。

最後に宣伝ですが、12月に「こどもとつくるまち」という催しを行います。ミニミュンヘンという、こどもが役割を担ってまちの運営をやってみるという仕組みを、先ほどの防災広場でこどもクラブ、学童保育、いろいろな団体共催でやろうと、いま準備段階に入っていますので、時間のある方は見に来てください。報告は以上です。ありがとうございました。

■学生や若者もキーマン

○奈須　ありがとうございました。ご質問、お願いします。よろしいですか。

○椎原　最後に１つだけ。こどもというと一般的には、小学生とか中学生とか、＜実年齢の低いこども＞という捉え方が１つあると思いますが、実感としては、世代的に一世代若い＜社会的なこども＞という２つ目の捉え方があります。いま、私も含めて30歳ぐらいになってからこどもを産む人が増えています。自分のこどもとは30ぐらいの開きがあるのです。学生たちや社会人になったばかりの人たちと関わると、年の差は15、16歳ぐらいですが、次の世代に何か伝えていこうと思うと、まずそのぐらいの人たちに伝わらないと、その次に伝わらないだろうという感じがあるのです。

谷中学校を始めたのが平成元年で、いま17年目に入ったところですが、実際、その中で体験してきた学生が、社会人になっても何か自分でやり続けるケースが生まれています。この芸工展なども立ち上げたメンバーは引退して、ご意見番というか後見人になって、いま中心を担っているのは23～26歳ぐらいの人たちです。谷根千工房の２世の人とか、家が店をしているまちの二世代目もいます。

あと今年の夏は学生が寺小屋をやりたいと言ってきました。私たちが借り受け活用している古い建物を学生たちが使って、夏休みの小学生を呼んで、そこで何日か過ごして書道や音楽、家やまち探検をし、古い建物とまちに触れあいました。その学生とこどもたちの年の差が15、16歳ぐらいです。そのぐらいのスパンでやっていくと自然な受け継がれ方がしていくのかなと最近思っています。

○奈須　こういうまちづくりの方法論に関することで、しかも子どもに居場所づくりということですが、子どもということをどう考えるか。年齢なんかも考えていきたいと思います。居場所ということが単なる物理的なものでないということが、いまあったのではないかと思います。ありがとうございました。

この後、グループ討論の進め方について木下さんからお願いします。

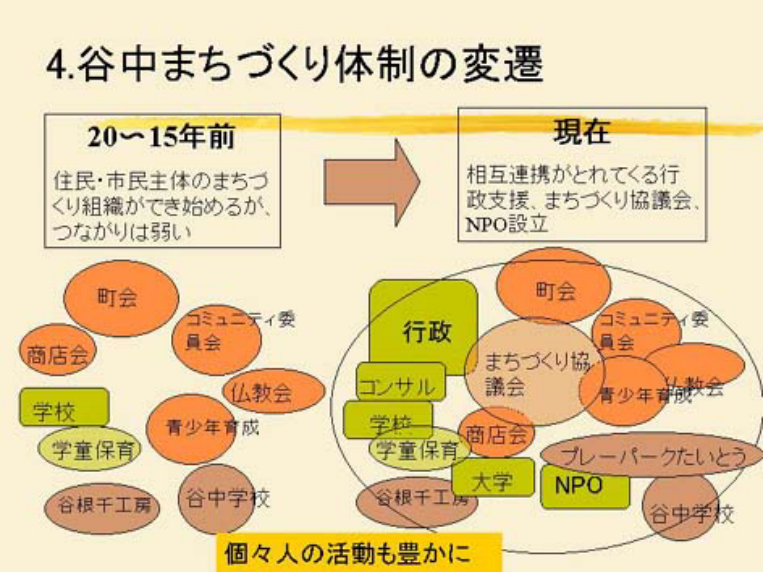


図８　谷中まちづくり体制の変遷

グループ討論
＆
全体討論

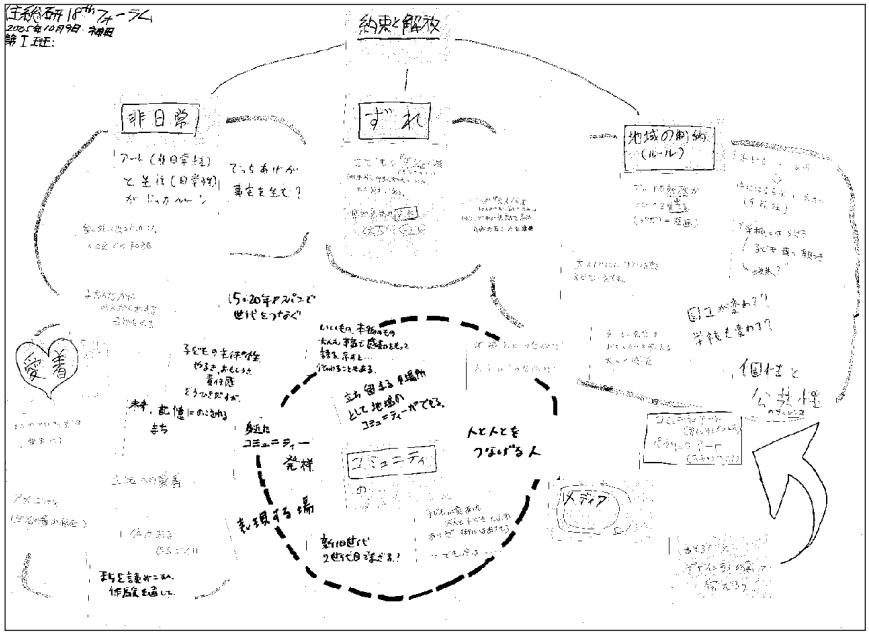
○木下　この後グループ討論をしたいと思います。今日は３つの地域での事例を参考にしながら、「子どもがまちを舞台にアート表現すると何が変わるか」というテーマで、今日お集まりの皆さんも、いろいろなところで関わりある人もいると思います。そういう経験を分ち合いながら「子どもがまちを舞台にアート表現すると何が変わるのか、本当は何を変えたいのか、それを変えるにはどうしたらいいか」、そんなところをグループで話し合っていただけたらと思います。

ポストイットに、いまの「子どもがまちを舞台にアート表現すると何が変わるのか」、「何を変えたいのか」、「そのためにどうしたらいいか」という３つの質問に関して、１枚１項目で２～３行程度書いてください。それをみんなでグループで討議していきたいと思います。

グループ討論風景

グループ討論
発表

■１班：「非日常」「ずれ」「地域の制約」



○木元(東京学芸大学)　まず、最初に出てきたキーワードとして、「非日常」、「ずれ」、「地域の制約」、という３つがあります。

ここで言う「非日常」は、アートという非日常性と、まち、生活という日常性がぶつかり合ってできています。「でっちあげが事実を生む」と書いているのは、もしかしたらできないかもと思っていたことでも、やっていくうちにできるようになってくることがあるということです。

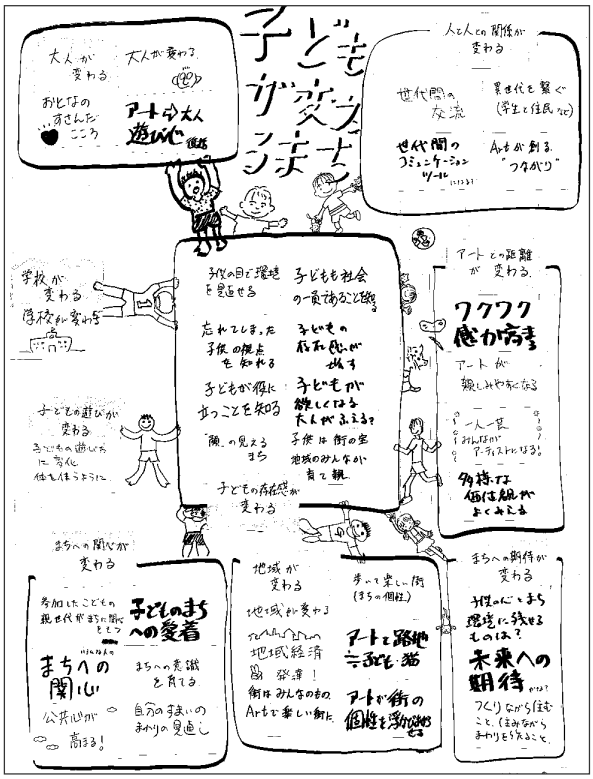
「ずれ」についてはいろいろあったのですが、子どもの大人化、大人の世界に子どもが首を突っ込むということや、子どもはだしであって、本当に仲良くなりたいのは子ども同士でなく大人同士である、というものも出てきました。

３つ目が「地域の制約」ですが、これはブレーキの開放がブレーキを育てるということです。普段の「落書きはしてはいけない」というブレーキ、それを壁画で開放することによってブレーキを育てることができます。あとは学校という制約を、まちでは開放することで、学校とは違う子どもたちの顔つきが見えてくるなどの意見が出てきました。

この３つのキーワードがまとまり、１つのキーワード、「約束と開放」が出てきました。

○久保田（東京学芸大）　「愛着とコミュニティ」は、一般的に初めに出てくるものかと思います。一時の盛り上がりだけでなく、体力のあるまちづくりにつながるとか、コミュニティですと親子世代ではなく、その間に入る15年とか20年ぐらいのスパンの世代をつなぐということにつながる。もう１つ、大きな疑問として、コミュニティ・アートとパブリック・アートの違いはどうなのか。「遊ぶ」と「デザインする」の違いについてという疑問が浮かんできて、これは皆様にもご意見を伺いたいと思っています。

■２班：アート活動に子どもが参加する意義



○新井（千葉大学）　まず、「アート活動に子どもが参加することの意義」について意見を出し合いました。その中でいくつかキーワードが出てきましたが、まず１つ中心に来るものはアートの活動を通して、その地域の子どもたちの存在感がまちに現れるということがあります。大人が地域について考えるときには、まず自分達の子ども、地域の子どもの存在を通して、子どもにとって暮らしやすいまちは何なのか、といったアプローチがあります。子どもの存在を見せることによってそうした意識が引き出されるのではないかと考えました。アートで地域に表れる子どもの存在を通じて、大人の地域に対する価値感が変わっていく。それによって人と人との関係、世代間の交流が生まれる。そうしたコミュニケーションのツールとなるということが挙げられます。

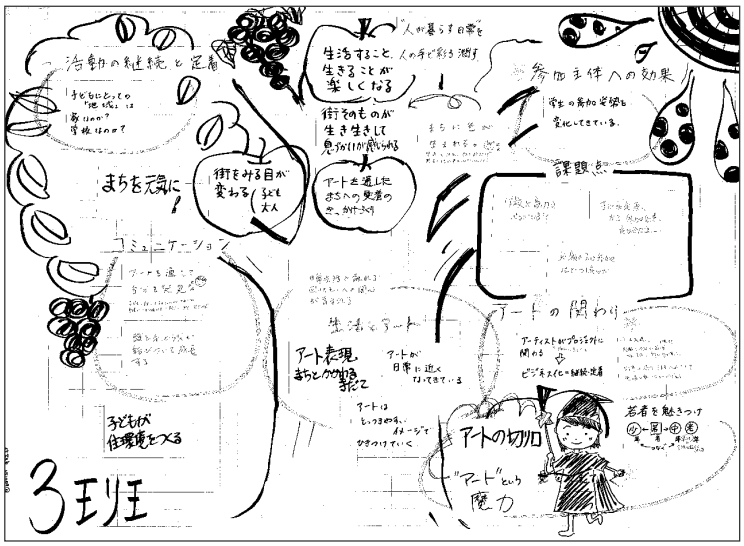
また、アートが地域に直接に出ることで、もちろん地域の個性が１つ生まれるということと、そのまちに現れた個性を地域に住んでいる人たちが普段目にすることによって、まちへの愛着、関心や公共心というものが高まるのではないか、ということが挙げられます。またそれを通してまちに対する期待、現在のまちと今後どうしたらいいのかということに対しても、期待が高まるのではないかというように考えました。

人の意識とともに地域、その中でも例えば特に学校などが地域とのかかわりを、子どもを通じてより持っていくきっかけとなるのではないかと考えました。

■３班アートの魔力で地域のつながり

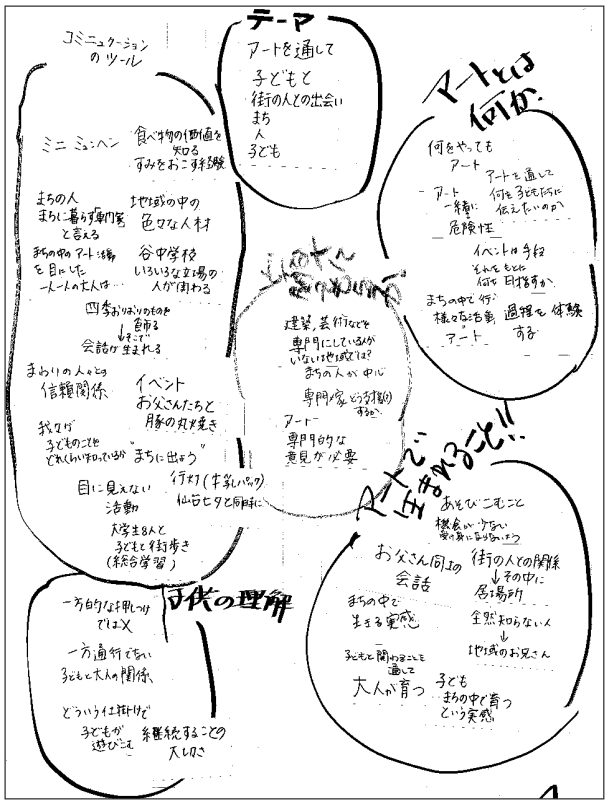
○河野（千葉大学）　私たちもまず「活動の継続性と定着」、「コミュニケーション」、「生活とアート」といったいくつかのキーワードを挙げて話し合いを進めました。最初に出たのが「子どもたちの居場所」についてです。小学生は自分の住んでいるまちと小学校の学区が必ずしも一致しないということがあり、自分たちが住んでいるまちに対しての愛着が持ちにくい環境にあるとも言えます。そんな中でアートという切り口が単にまちづくりということではなく、子どもたちが非常に積極的にまちを知るきっかけになるのではないかと感じました。そういう活動を通してまちに対する視点を持つことは、小学校のあるまちや自分の住むまちに対して愛着を持たせることに効果があると感じています。

また、話し合う中で１つのキーワードが出ました。それは「アートの持つ魔力」です。アートという言葉自体にも非常に魔力があるなと感じました。子どもたちが非常に関わりを持ちやすいというのもそうなのですが、例えば地域の中で子どもからお年寄りの方、私たち若い世代を含めて、なかなか言葉だけではうまくコミュニケーションや繋がりが持てない中で、アートという１つの魔力を使うことで、言葉ではなく、身体を動かしたり表現したりということを通して、地域の中での繋がりが生まれるのではないかと感じました。



この絵を説明します。真ん中の木は私たちの生命力を表し、木の根元にいる小さな子どもが「アートの魔力」を使う魔法使いです。アートが私たちの日常において活力やエネルギーになるということを表しています。アートを通して、子どもたちだけでなく大人も含めて、「生活すること」、「生きること」が楽しくなるようなきっかけをつくる。それがコミュニティ・アートを通したまちづくりなのではないかとまとめました。

■４班：アートはコミュニケーションツール



○筒井　私たちはまずはじめに、「子どもとアート」という活動をしたことがある人が具体的にどういうことをやってきたかということを話しました。

その中で出てきたのは、谷中学校の活動、お父さんたちとブタの丸焼きをすること、キャンプをすることや、行灯をつくることなどです。例えばブタの丸焼きなどは特に、アートと言えるかどうかは問題ではなくて、アートというのはコミュニケーションのツールである、その中で何を私たちが学んでいくか、その中で何が生まれていくかということが大切だというふうに話が進みました。

具体的に何が生まれるかというと、大人同士の会話で、あるいは子どもたちがお店のおじちゃん、おばちゃんを全然知らなかったのに「この前会った人だね」という、小さなきっかけから大きな出会いが生まれる、ということです。これはまちが変わっていく大きな要素なのではないかと思います。

活動で気をつけなければいけないのは、一方的な押しつけになってしまうことで、つまり「アート」というイベントを開いて、それで満足してしまうということがいちばん危険なことです。一方通行ではなくて、大人同士も相互に、子どもと大人もお互いに理解していく、そのことを忘れずにやっていくことが大切であるという意見が出ました。それと、どのような人に関わってもらうかということです。アートをするに当たって、専門的な人が関わってくれることが必要なのか否か、関わらなかったら単なる遊びで終わってしまうのかといったことも、これからもう少し考えていかなければならないことなのかと思います。

全体討論

■「非日常」が地域、学校を変える

○木下　ありがとうございました。質問はありませんでしょうか。

全体を見ながら、共通している点、重要な指摘、考えなければならないところに絞って議論したいと思います。まず、４つの班が発表された中で共通していることがあったような気がします。どういう点が共通して出てきたでしょうか。１班の人、どうですか。ほかの班を見ながら、共通して出てくるような事柄はありますか。いちばん印象に残ったことは何ですか。

○吉葉（琉球大学）　１班で議論になったのは「ずれ」や「非日常」というところです。つまり、大人にとって非日常的なものが地域を変えていく、大人を変えていく、あるいは学校を変えていく、そのようになるのかなと思ったのが１つです。

もう１つ、議論にはなりつつも疑問に思ったところで言うと、そういうずれを受け止める力量が地域にどれだけあるのかによっても変わるのか。ずれを受け止められていく地域であれば変わるだろうが、受け止められないというか、「保守的」という言葉を使っていいかわかりませんが、変わりづらい地域もあるのかなと思ったときに、新しい人たちとどう共有するのか。逆に今度、ずれをどうつなげていくのかというのは問題になるだろうと思いました。

○木下　その「ずれ」をもう少し詳しく言ってくれますか、どういうずれですか。大人と子どものずれでしょうか。

○吉葉　１班で出た話では、例えば図工の授業でやったときの絵の描き方と、例えばまちで壁画を描く絵の描き方というのはおそらく子どもたちの意識というのは違うだろう。例えば授業で図工をする、あるいは図工の時間に絵を描くということと、まちで絵を描くという形なのだと思います。あのような形で絵を描いたときのずれというのがある。

例えば疑問として上がったのは、あのような場に図工の先生が出会ったときに授業が変えられるのかどうか。そういう話をしました。

○木下　それは後藤さんに聞いてみましょう。先ほどのエピソードで図工の研究会か何かに行ったとき、アー

ティストが描き加えたことにいろいろ批判もあったみたいです。いまのお話も何か関連しているような感じがします。向島ではいま吉葉さんが言ったようなことというのはあったのでしょうか。授業の一環でやっているのと、まちでやっているのとの子どもの違いは。

○後藤　壁画は授業と別にやりました。壁画以外の「ネコの目」、「路地プロジェクト」は授業の中でやりました。ネコの目は図工の時間でやりましたけれども、路地プロジェクトのほうは総合の時間も使いました。そういう意味では、両方とも担任も入ってやりました。学校では見せない顔とか言っていましたが、学校でやっていても、結構図工の時間は楽しいのではないでしょうか。壁画のときと、路地プロジェクトで椅子をつくっているときの顔が違うという感じは私の中ではなかったです。

ただ、教員も一緒に入って、アーティストと話し合うというのは、いままでの学校ではなかったようです。そういう意味では、学校のほうも結構変わってくれたのかなと思っています。

○木下　非日常的なイベントだったけれども、学校の先生も普段の図工の授業とは違って変わってくるところがあったという感じで受け止められます。

他に共通している点、またいまのように気になる点や印象に残っている点、重要な問題指摘など気がつく点をお聞きしたいと思います。2班の方、どうですか。

■最も苦労したのは地域の人との関わり

○後藤　共通して言えるのは人と人との関わりが大事だということだと思います。私もいちばん苦労したのは人と人とのつながりです。特に地域への説明がいちばん苦労しました。谷中でも多分17年間の中で苦労されて、いまでこそ地域が受け入れてくださっていると思います。向島も非常に保守的な地域でしたので、それはどこがやっているのかということをよく聞かれました。「学校？」「学校ではないのです」、「ＰＴＡ？」「ＰＴＡではないのです」、「町会？」「町会ではないのです」。「じゃあ、何？」「子どもがいろいろまちづくりプロジェクト実行委員会をやっています」「それは学校で？」「いや、違います」。ずっと、その繰返しなのです。学校や町会以外が何かをやることには非常に抵抗感を持っている。そういうところを実行委員会が入ってつなげながら、ようやくできたというイベントです。

ただ、これが１回成功しましたので、次に何かここでやるというときにはもう少し入りやすくなっていくのかなという気がします。少しずつ、地域が変わってきているのではないかという気がします。そういう意味では、コミュニケーションが最も今回は大切だったと思います。

○木下　椎原さん、谷中では地域の壁はないですか。

○椎原　とんでもありません、日々新たな壁に出会いつつという感じです。壁というか、ずれとか制約とか、意思が簡単に通じないことがネガティブな意味ではなくて、相手が抱えているそれほど大きな深いものに、会って話してみて気づくということはたくさんあります。何年も、ずっと地域の町会で子どもの安全やお年寄りを見守ってきた方たちには、それを十分知った上で、作業も一緒にやり、プラスアルファ一皮乗せてみてくださいとお願いする。そこから関係が開かれます。自分たちのやっていることがわかって、その上で来たのだなというのと、このようなすごいものを持ってきたからどうだ、みたいな出方とでは全然受け入れられ方が違います。それと、谷中では、「ギャー」と言ってやってくる人は受け入れられないけれども、「ふわぁー」と来る人は受け入れると言われたことがありました。

○木下　ありがとうございました。３班、どうでしょうか。

■アートは「非日常」なのか

○千成（ＡＭＲ）　１班で出た「非日常性」にはとても違和感があります。いままでは非日常、芸術で、自分たちの生活から全然離れたものだという捉え方、保守的な捉え方があったと思います。こういう催しをすることによって、アートとはとても身近なもので、自分たちの生活の中のものである。いままで、日本にあった「印象派がすごい」というところから離れていくのではないかというところで、ちょっと「非日常」という言葉には違和感を感じました。

○木下　アートと芸術、美術、音楽も入るかと思います。つい最近までは「芸術」と言っていたのに、「アート」と言うとちょっと変わってきている感じがします。ただ、まだアート、芸術と言うと先ほどの印象派が、ピカソがというようになってくる。どうでしょうか。１班の人、非日常性についてどうですか。

○中津（関東学院大学）　「非日常」という看板を掲げたのが失敗だったなと、いま後悔しています。言われるとおりで、海外の場合、特にアメリカの場合はだいぶ前から、まちづくりにアートが利用されています。何か見せるためのアートではなくて、参加するキッカケとしてのアートを体験させる。そのこと自体が非日常と言えば非日常なのです。いままでやったことと違う体験をすることによって何か生み出す、そして何かに気付くという意味での非日常という意味であって、海外と日本とでは若干の意味が違うかもしれません。

○木下　お祭りとか、四季の行事とか。

○中津　そうですね、そういう新しい人間関係を生むこと自体がクリエイトという。

○木下　人間関係だったり、関係の確認だったり、子どもらにとっては通過儀礼というか、成長の段階での谷中のいろいろな行事などもそうです。そのような部分をアートと言ったとき、いわゆる我々の生活の中に持ってくるような行事なども含まれてくると思います。３班の方、あとはないでしょうか。

■公共性のあるアート

○郡司（お茶の水女子大学附属小学校　）　「アート」という言葉がキーワードになっています。今回のようにまちに出ていくといったときに、まちというのはパブリックなスペースですから、公共性のあるアートというところに特色があるので

はないでしょうか。先ほどもありましたように、いかに周りの人との折合いを付けながら活動していくか。自己満足としての自分のアート表現だけではなくて、そこに人やまち全体を巻き込みながら進んでいくものだと思います。なので、どうやって人や場所とつながっていくか、価値を伝えるか、という企画・運営面が重要で、単なるアートとはまた違う面がまちに出ていくとあるかなと思います。

○木下　ありがとうございます。これも重要な指摘かと思います。その辺、最後に４班の方が言われていたような事柄にも通じると思います。「一過性で終わってしまってはいけない」という話がありました、イベントで終わってしまうとか。４班は、ずっと最後までまとまらない感じで、じっくり話し込んで、話し込んだだけの突っ込んだ議論があったように思います。いまの議論など見ながら、本当にまちを変えることができるのか、子どもらを変えることができるのか、そのようなところからもう少し付け加えていただけたらと思います。

■アートという新たな切り口

○石毛　アートそのものという定義だと、「芸術」や「美術」という翻訳になってしまうかと思いますが皆さんとお話している中で、やはり谷中学校の椎原さんがおっしゃったように、実はアートにはいろいろな形があるのではないかと思いました。ただ、やってしまったことで終わり、そこに「学び」がなかったらまずいのではないかというご意見も出てきました。

木下委員がおっしゃるように、昔から日本の中にも「ハレの日」と「ケの日」があったかと思います。ハレの日が非日常的にポッと出てくることによって、そこですごく開放されたり、ハレの日でつながるコミュニティがものすごく大きな力を持っていたと思います。そこには物語性もあったし、とてもゴージャスな、１年の中でもそこだけは燦然と輝くような体験というものだったのではないかと思います。ですからアートと言う名の元に、たくさん満載というよりも、ハレの日がまれにあるというのも大事な点ではあるのかなと思います。いままで、「アート」という言葉でまちづくり、子どもの居場所づくりが語られることには慣れていなかったと思いますが、これから、子どもの居場所や子どもの生きる力を育むのに「アート」という切り口がツールとしてというか、良いものとして出てきていると思います。それもあまり手垢が付いてしまうといかがなものかというのがあり、かつて育ってきたときの「ハレの日」という感覚のほうが私はちょっと近いのではないか。むしろ、そういうときにこそファンタジーを感じて、自分の中にも日常とは違うドキドキ、ワクワクがあったなという気がしています。

○木下　アートのプロジェクトというのは一方的な押しつけは駄目、これは先ほど地域との関係などもそうで、やることの意味、位置づけというか、そういうことから魔法の使い方に気をつけなければいけない。あまり魔法が多過ぎると、また地域から反発するところもあるかということのようです。「魔力」、面白い表現かと思います。どうでしょうか。伊藤さん、高校生についてお聞かせいただけますか。何でもかまいません。子どもに近いところから、アートという今日のタイトルでどうですか。

■アートが生むコミュニケーション

○伊藤（和光高校）　どの班の方々も挙げているように、アートはまちに住む人たちのコミュニケーションを生む力を持っていると思います。まちで働いている人の写真を撮るという実践がありましたが、人物の写真を撮るためには、必ず声をかけなくてはなりません。「写真を撮ってもいいですか？」とまちの人に声をかければ、「何の写真撮ってるの？」「どこから来たの？」などと、そこから会話が始まり、コミュニケーションがスタートします。もちろん断られることもあるかもしれませんが、それもコミュニケーションのひとつです。そういった会話を通し、お互いが「出会う」「知り合う」ことで、まちは非常に温かい、人のぬくもりのあるまちになると思います。また、コミュニケーションによって人と人とがつながりを持つことで、何かあったときに助け合えるまちが創られてくるのだと思います。そういった視点から、アートは人間のコミュニケーションを生む、不思議な魔力を持っているのだと感じました。

○木下　ありがとうございます。大事な視点が出たと思います。いくつかのグループでもあったと思うのですが、子どもらが越境して通っているという地域性も都心部にはあるようです。いまは学校の選択制があって、子どもらが住んでいる地域でない、子どもが少ないということから、子どものまちとの関わりが薄れてきている。そういう中でまさに魔力が関わりを生み出したり、愛着を生んでくる。地域との関係や人々の関係が弱いところには、やはり魔力や魔法を使っていく必要があるということだと思います。

最後に、神田でやっている中田さんにお聞きします。いろいろやろうとすると、地域との関係の取り方が難しいという話がありました。それから、アートを魔力としてどのように使いながら関係をつくっていくかとか話をいただけますか。

■子どもがまちに愛着をもつきっかけに

○中田　まず、地域との関係性についてお話します。私たちは神田の地域に住んでいるわけでもありません。まず、活動を始めた初期段階は完全に外の人ということで、顔見知りもいませんでした。

そのような中で、まず最初は地域のイベントに参加させていただくことで顔見知りをつくる。それが徐々につながっていって、今度は私たちが企画するものを

▲　ファシリテーショングラフィックを書き込む町田委員と堤委員

受け入れてくださる。そのような中で、活動を通して人と人との信頼関係というか、人と人との関係性を築いていくことが大事なのではないかと思いました。

私も神田の地域、市ヶ谷の周りを歩いていると遠くから子どもに呼びかけられたり、急に名前を呼ばれてびっくりすることがあります。そのように、自分が住んでいない場所に愛着を持つというか、地域の一員になれた喜びがありました。

それは子どもたちにも言えることです。千代田区では越境の子どもが多いのですが、小学校、児童館、または子どもの基地のような、地域での居場所を中心とした活動の中で、子どもの美術館もそうですが、まちへ子どもたちが何かしらアクションを起こすことで、自分たちが関わったという愛着へのきっかけつくりとなります。子どもの美術館も明後日には作品を撤去することが決まっているのですが、作品がなくなったあとも路地に対しての愛着というのは変わらないと思います。作品がなくなったあとも一緒にあの路地を歩けば、また子ども美術館の話が出て自慢されると思います。自分たちの作品が飾ってあって、まちの人に見てもらった。何かイベントの思い出をつくるのではなくて、活動を通じてまちへの愛着、意識の継続性を生み出していくことが大切なのではないかと感じています。

○木下　このことはまた継続的にやっていくのですか。

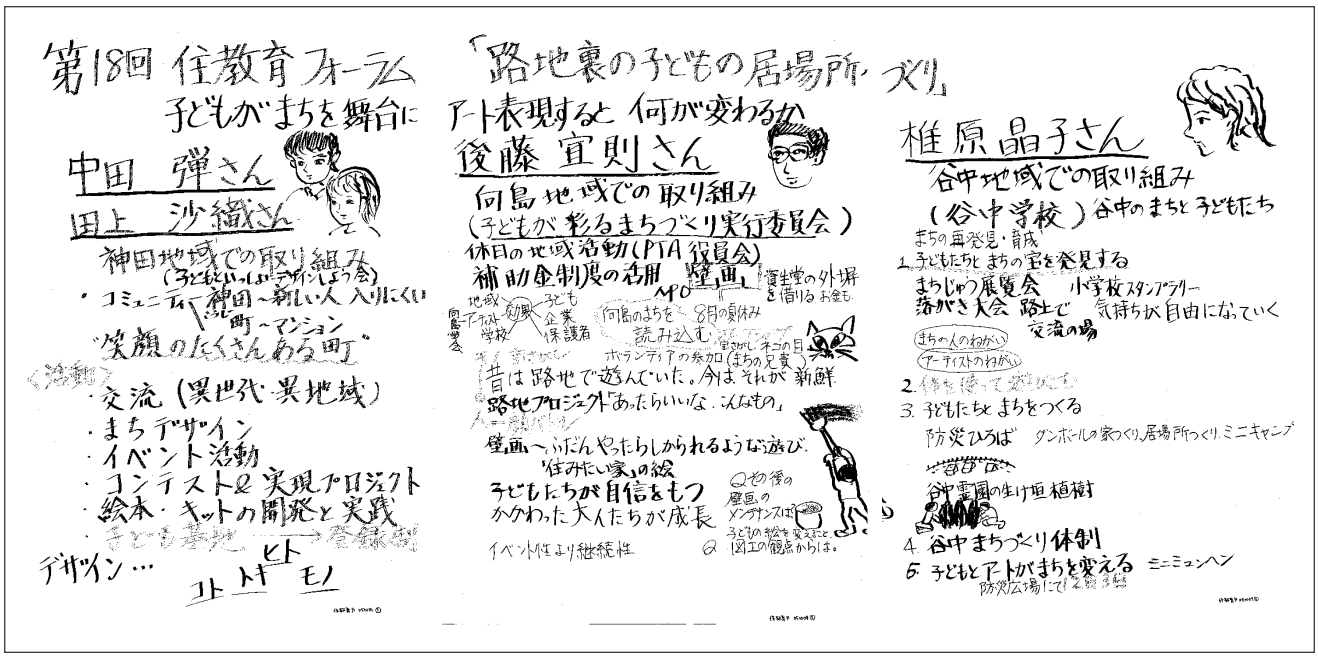
○中田　そうですね。1つのイベントを継続して日常的に行うのではなくて、先ほど「ハレの日」というお話がありましたが、いろいろな手段でまちを見るきっかけを与えてあげることで意識の重なり、愛着の重なりを生み出すことになるのではないかと思います。

■若者はどんどんまちに繰り出して

○木下　ありがとうございます。「子どもと一緒にデザインしよう会」のように学生のサークルが中心になり30名ぐらいというのはすごいなと思います。それから後藤さんの話、若いアーティストがネットワークで80人ぐらいいて、やるたびに若い、いろいろなアーティストたちが関わってくる。椎原さんの話、谷中の学生が関わってくる。その辺の議論まで行けなかったのですが、個人的に感じたのは、私のように年を取った人間より、子どもに近い側の大人が関わる方が子どもたちには親しみやすいのではないか。世代の話は先ほどの議論にもありましたね。そういうことがあるかと思います。昔と違って、若い世代が子どもに関わるということがない中で、割と子どもに近い人たちが「ハレ」のときでも来て何かやりますというのは、子どもたちにはすごく魅力的なことだと思います。

今日、星野くんという「子どもとデザインしよう会」の中心人物が来ていませんが、彼と以前、松戸の中学校でデザインのワークショップをやったとき、どうしても彼のほうが子どもたちに人気がある。「『若い』ということで人気がある」と、やっかみか、自分が年を取っていることに、ショックを受けました。そういう学生たちがどんどんまちに繰り出してやってくる。

アートの仕掛けも、私事ながら若いころは「大道芸術展」とか、いろいろ面白いこと、派手なことをやったものです。だんだん年を取ってくるとそういう発想、アートの力がなくなってくる。要するに魔力が弱くなる。鍛えなければいけないのですが、それはのちの問題として、若者たちがどんどんまちに繰り出しつつある。魔法の力がまだ強いうちに関わってもらうというのはいいことだなと思います。そういうことで延藤先生にお渡しします。



▲　当日のファシリテーショングラフィックより

まとめ

コミュニティ・アートを楽しみながら新しい世界を開いていこう

（財）住宅総合研究財団住教育委員会委員長
延藤安弘
愛知産業大学大学院教授／
NPO 法人まちの縁側育くみ隊代表理事

触発される思いをたくさんいただきました、ありがとうございました。主題に対して、全体に響き渡っているキーワードをすくい上げ、今後に備えたいと思います。

２つのパートに分けて束ねてみたいと思います。１つは子ども参加のコミュニティ・アートが何を変えるか。このことをめぐって発表と討論が行われました。何を変えるかという点では、５つのキーワードが今後に向けて発信されていたように思います。

■空き屋や見捨てられた壁に働きかけ、表現すると、子どもの存在感が促されてまちの親密な風景が育まれる

第１点は「空き屋や見捨てられた壁に働きかけ、表現すると、子どもの存在感が促されてまちの親密な風景が育まれる」。神田の路地の空き屋が見事に変身を遂げているところにワクワク、ドキドキしました。向島の見捨てられた壁は思いがけない、資生堂もびっくり、いいデザインがなされておりました。空き屋や見捨てられた壁に表現すると、子どもの存在感が浮かび上がってきて、まちの風景も親密になる。これが２つの地区の共通した体験から浮かび上がってくるコミュニティ・アートの効力ではないか。

■次から次への驚きをもたらす共同的表現楽しさがある

２番目、「次から次への驚きをもたらす共同的表現楽しさがある」。「次から次へ」というのが大事で、今日の３つの発表は次から次へ驚きをもたらす。しかも、個人的表現ではなくて共同的表現、コラボレイティブな表現の楽しさがある。個人の趣味ではなくて、公的空間の中で思いがけない兄ちゃんや友だちとの共同的表現の楽しさがある。気持を自由に解き放ち、新しい「ハレ」をもたらす。次から次への驚きをもたらす共同的表現、楽しさが、関わる子どもの気持を解き放つ。心の開放と合わせて、ハレとケという話がありましたが、日常の授業の世界とは違う方向感を得る。それはギャップではなくて、むしろ「ハレ」を通して日常の方法を鍛え上げる。そういう方向感を差し示しているのではないかと思いました。

■宝の再発見とアートという魔力活用には驚くべき地域資源が埋め込まれている

３番目、「宝の再発見とアートという魔力活用には驚くべき地域資源が埋め込まれている」。その宝の再発見とアートという魔力活用により、関わるみんなを変えていく。宝の再発見とアートの魔力活用、先ほどから言われているマジック・パワー、「マジック」と言ってしまうと通俗的になってしまうので、「魔力」という言い方に非常に新鮮な言葉の響きを覚えました。魔力活用は関わる人々みんなを変えてしまうという、そこにマジック的効果がある。アートはなぜ、あれほど人を変えるのだろう。３地域、それぞれに語られていました。特に後藤さんのように、難しいおっちゃんや自治会の連中も変えていく。自らが最も変わった。そういう仕掛け人と子どもとの間に、さまざまな人々が変わるとともにまちの原理、まちの原理というのは人が変わることではないか。変わる力がアートにはある。とりわけコミュニティ・アート、パブリック・スペース、親密な、個性的表現の場に参加をし、その体験を共有し、表現されたものをお互いに共有し合う。そういうところに人を変え、まちを元気にする秘密があるのではないか。

■からだを使っての遊びこみ

４番目に「からだを使っての遊びこみ」これは椎原さんのお話でした。からだを使っての遊びこみにはまつり参加など、アートによって感動が刻み込まれて、思い出と記憶が紡ぎ出されることが、谷中の17年の素晴らしい経験の中に集約されているのがわかります。谷中芸工展というのは個別的でしたが、からだを使っての遊びこみ、まつり参加、アート表現、広義の子ども参加のコミュニティ・アートは子どもの心身に感動を刻み込み、生涯忘れられない思い出の記憶となって身体にしみ込んでいく。幸せな生き方というのは、子どもの時代に最も豊かなる思い出や記憶が刻まれるところにある。そういう切り口からコミュニティ・アートの教育的効果、あるいは子どもの生き方を方向づけていく重要な普遍性があるのではないかということが語られていました。

■差異のマーキング

５番目に「差異のマーキング」。差異というのは違いです。現実は「こんなものだ」というように、みんな常識の中に閉じこもっているけれども、アートというのは思いがけない差異のマーキングのこと。ぶっきらぼうな、無機的ブロック壁があのように変身を遂げる。潜在していた力をアートの力によって新しい現実に変える。これが差異のマーキングという、アートの極めて重要な作用だと思います。そうすると、どこかの班のキーワードの中に、「言語的表現を超えるメッセージ」という素晴らしい言葉がありました。

この差異のマーキングと言語的表現を超えるメッセージ、言葉による表現の世界には限界がある。言葉というのは意識のあらわなる形の表現です。未だ言葉にならないモヤモヤしたものは言わば遊び、縁、そしてお互いに形にならない状況で感動を伝え合う。言語的表現を超えるメッセージは現実を創発させる。現実を未来への方向感を関わる人々の心の中にとどめさせる。創発的現実をもたらすコミュニティ・アートというものがある。子どもが変わる、大人も変わる、社会の仕組みも変えてしまうかもわからないという期待感や予感を抱かせるものが、今日の発表に潜んでいた、「コミュニティ・アートと社会的力」の１つの重要なポイントではないかと思います。

■コミュニティ・アートが暮らしに送る「あったかさ」

この５つのキーワードの頭文字、空き屋の「あ」、次から次への「つ」、宝の「た」、からだを使っての「か」、差異のマーキングの「さ」、縦に読んでみると「あったかさ」となります。いまの日本の社会の教育も、コンピューターもいささか冷たいではないか。もっとあたたかい日々を送りたい。これが子どものうめき声である。コミュニティ・アートは子どもの日々の暮らしの中に「あったかさ」という、人間が生きる上でいちばん大事なものを送ってくれる。そのような、極めて重要なキーワードが全体の中に響きわたっていたと思います。

子ども参加のコミュニティ・アートは何を変えるかという５つのキーワードに加えて、どうしたらどこでも出来るのか、変える方法を第２パートのまとめとして着地点を探りたいと思います。

変える方法を４つのキーワードに束ねてみたいと思います。

■Pleasure―不意打ちを伴う感嘆すべき楽しいプログラム

１つは「不意打ちを伴う感嘆すべき楽しいプログラム」です。ちょっと絵心のあるアーティストを連れてきてというのではなくて、向島のアーティストを連れてきたというのは不意打ちをくらわせる、驚くべき感嘆プログラムを提起していました。神田の学生諸君もそうです。谷中の17年にわたる数々の活動の中に、不意打ちを伴う感嘆がある。そうでないと、先に述べたようなあたたかさをもたらさない。ただ楽しければいいのではなくて、あっと驚かせるような楽しいプログラム、英語のキーワードで“Pleasure”になります。

■Leader＆Support―まちの兄貴と一緒にやると肩の力が抜ける

２番目は「まちの兄貴と一緒にやると肩の力が抜ける」という話が後藤さんからありました。「まちの兄貴」と思えるような肩の抜ける、人と人をつなぐ柔らかいリーダーと楽しいプログラムを提起できる若い専門的サポーター。やはり、若さこそ世界を変える。子どもの世界を変えるのは若さである。でも、若さだけではなくて、柔らかいリーダーと専門性を持ったサポーター、英語のキーワードで“Leader＆Support”です。

■Action-Oriented―継続性を内在させたイベントの持続的活動指向

３番目に「継続性を内在させたイベントの持続的活動指向」、イベントは一過性である。でも、向島の経験は継続性を内在させたイベント、継続性と一過性を対比させるものではなくて、見事に流れの中に統一させました。プログラムにおける継続性を内在させたイベントが翌年、さらに次の年、17年も続いたのが谷中です。あの谷中を輝やかしいまちに育て上げてきたのは、この継続性を内在させたイベントの持続的活動指向ではないか。持続的活動指向で谷中学校の発案から、住民の発案から、伝統的な菊まつりから、菊を「利き酒」みたいな、めちゃくちゃ面白いしゃれにして楽しんでしまうという、次から次への持続的活動指向、英語で言えば“Action-Oriented”でしょうか。Action, 楽しい活動をたゆまず指向し続ける、Action-Orientedが谷中をして、個別の解から一般解に促していく。

■Young＆Old―子どもをだしにして、まちづくり体制を時をかけて育む

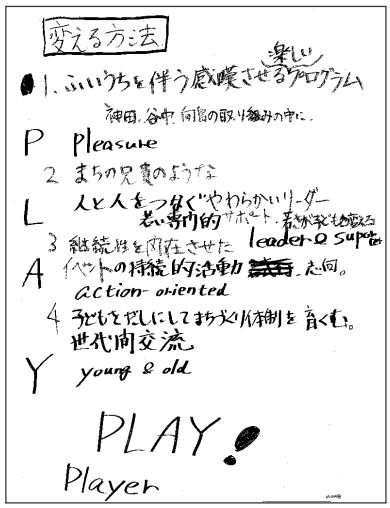
最後に４番、「子どもをだしにして、まちづくり体制を時をかけて育む」。まちづくり体制を、17年かけてあのように見事なネットワークが生まれたというのは谷中の経験です。でも、あのようなシステムを目指したわけではなくて、子どもをだしにしていたというところにヒントがあるように思います。子どもをだしにというしなやかな、したたかな発想、まちづくりを時をかけて育む。行政、学校、市民、企業の連携という、向島という地域、あるいは神田という地域の連帯性とともに世代間交流、いろいろな組織の連携とともに老若男女が地域で、反目もあるけれども、先ほど言っておられたようにギャーと言ったらおさえつけられるけれども、フワッと言ったら認めてもらえる。この柔らかいアプローチが、実はどんな頑固親父がいるところでも世代間交流ができるという秘訣を授けていただきました。世代間交流、“Young＆Old”というキーワードを添えておきたいと思います。

■Play―プレイヤーとしてのコミュニティ・アートを楽しみながら新しい世界を開いていこう

さて、４つのキーワードの日本語の頭文字は何の脈絡もないので無意味ですが、アルファベットの頭文字を縦につないでみると“PLAY”、いまひとつのキーワードにつながります。遊び心を持ってワク

ワク、ドキドキしながら状況づくりをする。コミュニティ・アートに関わる仕掛け人はまるで、困難に立ち向かう演劇的なる作法をもって、次から次へと状況をくぐり抜けていくプレイヤーとしての立場が我々大人世代、教師の役割、あるいはリーダーの役割ではないか。プレイヤーとしてコミュニティ・アートを次から次へと、楽しみながら新しい世界を開いていこうではないか。集まられた皆さん方の心の中にそういう方向感を共有できたことをもって着地点にしたいと思います。

私たちを刺激してやまないお話をしていただいた４人のパネリストの方々に、心を込めて感謝を示して終わりにしたいと思います。ありがとうございました。



▲当日のファシリテーショングラフィックより

見学会
レポート

住・まちづくりフォーラムかわら版　18　©
発行日　2006年３月（非売品）
(財)住宅総合研究財団
住教育委員会＝延藤安弘，小澤紀美子，木下勇，町田万里子，奈須正裕,堤祐子
(事務局)伊藤敏明，岡崎愛子,岩間恭子,平井なか
発行人　峰政 克義
発行所　財団法人　住宅総合研究財団
〒156-0055　世田谷区船橋 4-29-8
TEL 03-3484-5381　FAX 03-3484-5794
URL:http://www.jusoken.or.jp
E-mail：jusoken@mxj.mesh.ne.jp